

---

# とある世界の幻想書庫

i&amp;r

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある世界の幻想書庫

### 【Nコード】

N8945Y

### 【作者名】

i&amp;r

### 【あらすじ】

ある日突然死んでしまった青年。その原因は神のミスというなんとテンプレな展開で二つ返事でとあるの世界に転生する事に。新たな世界で彼は一体何をするのか!?

原作ブレイクやクロスオーバーが苦手という方は見るのを遠慮するのがいいかも？

## プロローグ（前書き）

どうも初めまして読者の皆様。作者の？&rで御座います。

原作やアニメを見ていたらつい書きたくなって書いてしまいました。

処女作ですので暖かい目で見守って下さい。

それではどうぞ！

## プロローグ

目を覚ますとそこは何も無い真っ白な空間だった。

「……………知らない天jy：空間だ」

こういった場面のお約束みたいなセリフを言ってみた。因みに言い直したのは立っているのか浮いているのかも判らない曖昧な状態だから。

「何でこんなトコに居んだろ？」

記憶の糸を辿ってみるか……

〈回想スタート〉

その日俺は何処にでもある様なマンションの一室で本を読んでいた。

「……………眠イ」

幾ら暇だからってこれだけの量の本を一気に読み返すのは流石に無茶だったか？と目の前のテーブルに積んだ読み終えた本の山を見る。ファンタジーだったり学園物だったり元ネタがゲームだったり様々であり、それ等全てを含めた総数は約200冊で半数以上がラノベ。

それらを一気に読めは如何なるか……

「酷エ顔だな」

鏡を見て呟く。

目の下には『それってメイク？』とツツコミが入りかねない程の隈が出来ており、髪もボサボサでちらほらと枝毛が目立つほどに荒れている。

「流石に五徹はやり過ぎた……寝よ」

フラフラとベットに向かいそのまま倒れ込む。

（あっそついや今日って新刊の発売日じゃん！起きたら買いに行かな……いと）

そう思いながら意識が薄れて行き、直ぐにいびきを掻いて眠りだした。

く回想終わりく

そつだ！俺、五徹して本読んでそのまま寝たんだつた。……って事は、ここは夢の世界か。そうと判れば……

「寝よ」

「寝るな！」（ドコンッ！）

いきなり背後から誰かに頭を殴られた。振り返るとそこには真っ白な翼を持った金髪の女性が一棘付きバット（エス〇リ〇ルグ）を肩に担いで立っていた。色々和讯きたい事はあるがまずはこれだろ。

「…えっと、まさかその撲殺バットで俺の頭を殴ったのか？」

「そうよ、私は流血沙汰は嫌いだから中は空洞のゴム製で表面にメタリックの塗装なんだけどね」

そう言つてバットをグニャッと曲げてみせる女性。まっ、どうせ夢だし本物でも痛くn「夢じゃないわよ」・・・は？

「夢じゃないって…俺、五徹明けでそのまま寝たはずなんだけど夢じゃないってどゆ事？」

「ちゃんと説明するわ。少し長くなるわよ」

別に構わないと答えると淡々と話し始める。



説明は一時間ほどで終わった。

「つまり今の話を要約すると貴女は天使で上司の神が書類整理中にお茶を零し、俺の書類の寿命の欄を滲ませ読めなくなりそれによって俺は死んでしまった。そして貴女はただでさえ仕事如山積みなのに余計な仕事を増やしてくれた神をタコ殴りにしてこの事の処理に来た、とそれで間違い無いっすか？」

「ええ間違い無いわ」

「そっか俺、死んじまったのか。」



「死んでしまったと言うのに随分落ち着いてるわね。普通の人間なら泣き叫んで取り乱したりするのだけど」

「まあ自分の思うまま自由に生きてたから後悔はしていない。で、俺は天国と地獄どっちに送られるん？」

父さん母さん、先立ts…先立つた不幸をお許し下s「どちらでも無いわ」…っえ？

「本来、天界の書類に書かれた寿命が尽きる前に死ぬのは余程の極悪人を除いて存在し得ないわ。そこには一切の例外も存在しない、故に貴方を天国にも地獄にも送る事が出来ない。かと言って元の世界に戻すのも世界が崩壊してしまうから不可能、となると嫌でも別の世界に転生して貰うしかないのよ。此方の過失だから貴方の望みは出来るだけ叶えるわ」

「それはまたテンプレな展開。別に生き返れるのなら別の世界でも良いんだけどその望みつてのはどんな物でも良いん？つてか読心術使った？」

「天界に住む者は殆どが使えるわ。あと責任を取るのは上司だから別に良いわよ」

ニッコリと笑顔で答える天使さん。だが目のハイライトが消えていてちよつと怖い。

「じゃあまずは転生する世界はとある魔術の世界。次に身体能力の上限を無くして鍛えれば鍛えるだけ強くなるように。あと体質で完全記憶能力と能力は自身の記憶している情報を具現化する能力で宜しく」

「ちょっと待ちなさい……………この内容ならあと三つまで追加可能だけれどうする?」

これでもかなりチートにした積もりなんだけど……………まあいいだ。

「それなら世界中のありとあらゆる言語を日本語と同じ様に読み書き話せる様になるのときゅーきゅーキュートに出て来た混沌としたリアル実在を自分の意志でON/OFFが可能にするのとジャック・ラカン+川神百代分の氣をGNDドライブ方式で欲しい」

流石に無理が有るかな?

「問題ないと最初に言った筈よ。さて、向こうに着けば全て貴方の言った通りになっているから第二の人生をしっかり生きなさい。ただ一つ、混沌とした実在を使っている時はそれに打ち消されて他の能力や氣を使えないから注意しなさい……………ああ、言い忘れてたけど送るのはとあるの世界に限り無く近い世界だから貴方も知らないイレギュラーが起こる可能s「俺というイレギュラーが入るんだからその位は想定範囲内ですよ」そう、では最後に一言」

コホン、と咳払いをする天使さん。

「御免なさい!!」

いきなり深く頭を下げ謝罪の言葉を口にする天使。

何故?

そう思ったがその疑問は直ぐに解決した。立っているという感覚が

消えて足元に黒い穴がポツカリと開いていたからだ。

「こつという事は最初に言って欲しかったあああああああああ  
あ」

吸い込まれる様に落ちて行き次第に声も聞こえなくなる。その穴を  
天使が見つめていると……

「行つたかの？」

背後に音も無く杖をついた爺さんが現れた。

「はい、たつた今送つた所です。しかし宜しかったのですか？彼に  
本当の事を伝えなくて」

「ミカエルよ、あれだけの陳情を一気に処理するにはうってつけだ  
つたんじゃよ。それに知ってしまえば芝居臭くなってしまうしの」

「私は仕事が効率的に進むのならそれで構いませんがこの件に関し

ての今後の処理は全てキッチリとやって下さいよ、ゼウス様」

「分かっておる。元はと言えばワシが気紛れに言った一言から始まったことじゃからの。それよりも配信準備を始めるから執務室へ行くぞ」

そういうとゼウスとミカエルは霞の様に消えていく。

完全に姿が消える直前、ミカエルは穴を見つめてこう呟いた。

（我、大天使ミカエルの名において汝、  
の第二の人生が幸  
多きものであらん事を切に願う）

## ブローグ（後書き）

如何でしたでしょうか？

誤字・脱字・感想などがあればどうぞ。

**第1話 ギャグパート? いいえ、修行です(前書き)**

早速次の投稿です。

それではどうぞ！

## 第1話 ギャグパート? いいえ、修行です

俺が無事に転生してから早5年の月日が流れた……え? いきなり端折り過ぎだつて? 良い思い出が殆ど無いから話しても仕方ないよ。

「さうて奏志よ、お前も五歳になった事だしそろそろ修行を始めても良い頃かの」

ああ、言い忘れていた。俺の今の名前は鉄奏志<sup>くろがねそうし</sup>、鉄家の長男だ。因みに今話し掛けてきたのは祖父で名前は鉄陣内。両親はいない……というよりも知らない。転生して最初に気がついた時には爺様に抱かれており両親の顔を一度も見ただ事が無いからだ。

その理由を爺様に幾ら尋ねても「いずれ時が来れば話す」としか答えて貰えず、その時の爺様の表情を見た俺はそれ以来、その話題を封印して爺様の言うときが来るのを待つ事にした。

それはそうと、鉄陣内<sup>てつじんない</sup>

その名前を聞いた時、最初はつよきすの世界なのか!?!とも思ったが直ぐに違つと判明した。地図を見るとシツカリと学園都市が存在していたからだ。だが鉄陣内の強さや性格は例え世界が違えども違わないらしい。なぜなら……

「じじ様、修行の内容は?」

そう訊けば

「な」に奏志はまだ身体も出来上がつておらんからあまり無茶な事

はせんよ。わしが毎年おじやましとる龍穴へ連れて行って氣の効率的な扱い方や何やらを教えるだけじゃよ」(がしっつ)

と答え俺を脇に抱えるのだ。

俺は嫌な予感しかしなかった。日本の龍穴ならまだしもそれが海外に有り、この陣内がつよきすの陣内と同じ性格、強さを持っているなら移動手段はたった一つ。

「えつとじじ様、その場所って日本国内だよね？」

「とうツッ！」

「無視ですか！」

「どうでもよいが黙つとらんと舌あ噛むぞい。では行くぞ！まずは富士の樹海！！」

ゴッ！！！！(加速)

「グエツ！！！」

いきなりの急加速に俺の視界はブラックアウトしていった。

「何じゃこれしきの加速で氣を失いおって、こうなったらとことん鍛える必要があるわいわい。国内の靈泉だけの予定じゃったが世界48箇所龍穴巡りも追加じゃい！！」

意識を失う直前にそんな声が聴こえた。



……マジでか!?

ここからは長くなり過ぎるので一部のみお伝えします。(by作者)

「富士の樹海」

「ほれ着いたぞ、さつさと目を覚まさんかい!!」(ポイツ)

ドボンッ!!

「……ちべてええええええ!!」

何だこの水メチャクチャ冷たい!つてか何で俺、こんな水ん中にいるんだ?

「じじじじじ爺様まままま。iiiiiiiiiiiiiiiiiiii  
いかななににを!!」

「起きたか奏志よ。富士の麓のこの霊泉で泳ぎ、日本中の地精の力を感じられる様になるんじゃない!ただし水の温度は-18度じゃから5分以内に感じられんと凍死だぞ」

「普通氷になるよねえ!!」

「南米アマゾンの何処か」

「さああの鰐の背中でワサビを摩り下ろして来るんじゃない」

「霊泉関係無いじゃん!!」

「関係ありまくりじゃ! 此処も霊泉の一つでそこに住む鰐の背で摩り下ろしたワサビは最高の味になるんじゃない、さあ逝<sup>ゆ</sup>けい!!」

「字が違あああう!!!!」

「スペインの闘牛場」

「今日は霊泉は関係無いがどの位出来る様になったのか確かめるとするかの」

「爺様、目隠しに手錠と足枷したこの状態で何をするんですか?」

「なぐに簡単な事じゃ。その状態でバイソンと闘牛をして5分間逃げ切るか勝てば良いんじゃないよ」

「それって俺みたいな子どもにさせる事じゃないよねえ!!」

以上が修行内容の極一部です。

5年後……………時間の経過は気にしないで下さい。色々あったんですよ、色々だね……………

「奏志よ、お前ももう10歳になり氣の扱いもワシを除いて鉄一族歴代最高位になった事じゃしそろそろ龍穴巡り以外の事でしょうかの」

「それはそうと爺様、昨日蔵の掃除をしてたら隠し扉見つけてさ。

中に入って一番奥まで行ったら何か異様な雰囲気きふきの脇差が出て来たんだけどこれって何なの？」

袋に包んだ脇差を爺様の前に出すと何時もケラケラとした爺様の目つきが変わった。

「奏志、あの扉を通る事が出来たのか！？」

「うんそうだけど？」

「あそこにはわしが氣で封印しておった筈なんじゃがのお」

爺様は指で髭を撫でながらそう答えた。

如何なる力であつてもあの方法を除けば混沌カオティック・リアルとした実在の前では無意味に等しい。最も、爺様ならそれをしなくても貫通しそうだけど。  
(笑)

「……ふう、いつかは教えるつもりじゃったから丁度良いか。奏志、よく聴くのじゃ」

改めて鋭い視線を送って来る爺様。そこには祖父としての陣内ではなく武術の師匠としての陣内がいた。

俺も改めて正座し直す。

「……この脇差は100年前にわしが世界48箇所の靈泉でわしの氣と各地の力を混ぜ合わせ出来上がったエネルギーを込めながら鍛え上げた対の刀の片割れでの」

100年前って爺様いつたい歳幾つなの？

「でじゃ、出来上がった刀を試しに軽く振るってみたら海が2、30キロ程割れての、危険過ぎるんで蔵の隠し扉の奥に仕舞い込み、コイツのある場所の扉には全盛期の頃のわしが氣で封印を掛け刀も幻術で見えなくした」

ごめん爺様、俺の目にはバツチリ見えました。

「そして何時の日かその双方の術を突破した者に刀を託す事に決めたんじゃ。奏志よ！これからは剣術の鍛練に重点を置くから覚悟するのじゃぞ」

覚悟？そんなもの……

「覚悟なんてしてもしなくてもやる事は変わらないんですから今更ですよ爺様」

「かぁーっカッカッカッカ。確かに違いはないわい」

あつ！何時もの爺様に戻った。

「で爺様、さつきは聞き流してたけど対になってるもう一方の刀は何処にあるの？」

対の刀として鍛え試し斬りをした時点で封印したのならもう片方もある筈だが蔵の中にあつたのはこれ一本のみ。

「もう片方はわしの友人に預けてあつたんじゃが今はそいつの孫が持っておる。縁が有ればその内会えるじゃろうから今は修行に専念

する事じゃの」

「分かりました爺様、一日でも早くこの刀を自らの手足の如く振るえる様頑張ります!!」

「うむその意気じゃ奏志よ。ではまず剣術の基礎知識として地下にある蔵書を全て読むのじゃ!!」

「はい!!………つてええ!!?あの扉を開けて直ぐに本の壁になつてる部屋の中の本を全部!!?」

「そうじゃ。読み終えねば剣術は教えんから教えて欲しければ早く読み終えることじゃの」

そう言つて爺様は俺に一つのボタンを持たせた。

「わしは今から旅行に行くんで暫くは連絡がつかん。読み終えたら氣を込めながらそのボタンを押すんじゃ」

とうつつ!!

と、空高く飛び上がり爺様は何処かに行つてしまった。

「……………」

ぴゅうううううと奏志しかない庭を風が吹き抜ける。

「……………まずは本の整理からか、はあ」

溜め息をつきながらも階段を下りて爺様の集めた本が置いてある保



っせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、  
せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっ  
せせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせ  
っせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、せっせせっせ、  
．．．．．

あほおゝあほおゝあほおゝ

空が赤く染まりカラスの鳴き声が聴こえる。

「一日中運び出し続けてまだ全部じゃないってマジで何冊あるんだ  
よ!?!」

幾ら運び出しても本の壁が終わらない…軽くノイローゼになりそう  
だ。

「今日はこれ位にして運び出したの読むか」

一階に上がり運び出した本を見る。見える部分だけで見積もっても  
軽く500冊以上あるな、しかも全部ハードカバーのハリポタサイ  
ズで……



「こりゃ普通に読んでたらこれだけで一月は掛かるな……」

いや読書自体は前からの趣味だから苦じゃないんだけどね、流石に量が量だから普通に読んでたら原作に間に合う気がしないんだよね。

「氣で身体強化して読むか」

意識を集中して氣を練り上げる。別に意識しなくても可能なのだがそうするとぶつちやけ燃費が物凄く悪い。どの位違うかと言えば同じ量の氣での持続時間がF1カーと低燃費車の差位はある。最もGNDドライブ方式の俺にとっては些細な事なのだがマラソンをクラウチングスタートで走り出す人物が皆無な様に何か氣分的に嫌なのだ。

とまあそんな話はさて置いて練り上げた氣を身体中に流して強化し、その上で更に目を強化する。

「よし強化完了。この状態でなら2〜3日で読み切れる」

最も近くにある本を手取る。タイトルは……………

「えゝ何々、時空管理局執務官資格試験過去問集……………」

俺は本を開いて問題を解きながら黙々と読み進める。

タイトルに突っ込まないのか？そんな事、爺様と5年も一緒に修行してたら悟ったよ、『爺様のする事は考えるだけ無駄』ってね。

「はい終了。さーて答え合わせっつと」

本に備え付けられた回答と照らし合わせる。結果は……

「ギリギリ合格ラインか……まっ結果は如何でもいいし次ぎ行こ」

過去問集を閉じ次の本に手を伸ばす……………

2日後

「……んゝゝ！！これで最後つと」

持ち出した最後の本を読み終えた奏志は身体を軽く伸ばす。

バキバキつと全身から音が鳴る。

「しかし、まさかこれだけ読んで剣術はおろか武術に関係する本がゼロとは……」

明らかにネタと言える本も最初の過去問集だけだったしその他は世界各国の地理や歴史書、政治に経済とジャンルだけは豊富だった。

「爺様、学校の先生にでもなろうとしてたのかな？」

本を部屋の隅に積み上げながら呟く。爺様が教師……あれ？一瞬、魔法使いの集まる学園都市の長のポストにいる姿が見えた。

「……まっ、そんな如何でもいい事に費やす時間が勿体無いし次ぎ行こっ」

保管室へ新たな本を取りに向かう。

## 第1話 ギャグパート? いいえ、修行です(後書き)

お読み頂き有難う御座います。

色々と省略しまくってますがそれは徐々に明らかになって行く予定なので気にしないで下さい。

誤字・脱字・感想・疑問などありましたらどうぞ。

それではまた次回お逢いしましょう。

第2話 ギャグパート？はい、そしてカオスな予感です（前書き）

気付いてみれば5000字オーバー。長いのかな？

それではどうぞ



本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本  
本 本 本 本 本 本

見たいな感じで不規則に積み重なっているので下手に引き抜けば連鎖的に崩れ出して大変な事になるのだ。

と、話が若干ズレたので戻すでしょう。

崩さないように引き抜いた本のタイトルは・・・

IS基礎理論

まさか!?!?と思い著者の欄を確認するとイニシャルのみが記載されていた。

著者：J・S&T・S

提供：時空管理局&IS学園

「ふーん成る程……って著者名隠しても提供部分明記してたら意味無えだろうが!?!」



思わず突っ込んでしまった。

多分あの二人で間違い無いだろうがマッドサイエンティスト同士が次元世界はおるか作品の壁すら越えて共同で執筆したであろう本……どんな力オスな内容なのか楽しみだ

期待に胸を膨らませながら本を開く。その内容は皆様の想像にお任せしますが……著者が著者だけに凄かったとだけ言っておく。

「さて次のタイトルは……」

IS基礎理論を読み終えて早3日。あれ以降まともな本が皆無となりネタとしか思えない本やこの世界に存在するとかかなり危ない本などを次々と読破していきそれ等を読破済みの本の山に置きながら手

探りで次の本を掴み……取れなかった。

「……えっ!？」

顔を向けてあらビックリ、先程まであった筈の本の壁が無く壁が見えており、足元を見れば床は無く更に地下へと続く階段があった。

「まだ地下があるんかい! って今更驚く事でもないか……にしてもなんか不思議な感覚だな」

危険な香りがしたかと思えば安心出来る香りがしたり、ゴツゴツとした硬い感じがしたかと思えばフワフワとした柔らかい感じになっていたりと何がなんだか訳が分からない感じだった。

「確かめた方が良いよな、面倒臭いけど……」

そう呟いて奏志は階段を下りて行く。

たとえ途中から光が届かず視界が通常なら限り無くゼロに近くなるうとも毒蛇毒虫が大量発生していようと無視してどんどん下りて行く。

最初の方こそ噛み付こうとしたり針で刺そうとするのが居たが軽く威嚇しただけで襲って来なくなつた。

そんなこんなを続けながら一時間ほど下り続け「いい加減そろそろ帰りが面倒臭くなるな」となどと考え出した時、漸く最下層に到着した。

階段地獄から開放され、暫く廊下を進むと淡い光と共にダイヤル付きの金属製の扉、要するに金庫が現れた。

「何故にこんな所に金庫？それかなり古い……」

ダイヤルやドアノブは錆び付きその周囲も長年放置されていた為か  
蔦や苔で覆われてしまっている。

試しにダイヤルを回してみようとしたが予想通り一ミリたりとも動  
かなかった。

「やっぱ動かないか。いつそ殴って壊すか能力使って焼き切る…何  
だ、これ？」

扉に何かが刻み込まれているのを発見した。錆び付いていて読み難  
いが表面を軽く払うとある程度読み易くなった。

“ かぁーっカッカッカ！この扉を殴って壊そうとしても簡単には  
いかんぞい。あと扉の中にTNTを100トンほど詰め込んでる  
から火器は使わん方がええぞ。健闘を祈る”

100トンって………

「……仕込み過ぎだ！！！！！！」

幾ら地下深くにあるとはいえそれだけの爆薬が一度に爆発すれば被  
害が出ない筈が無い。付け加えるなら保管室からこの扉まで隔壁な  
どという物は存在しなかった……つまりは地上まで繋がっている状  
態なのである。

そんな状況で爆発すればほぼ確実に鉄家を中心とした幾らかの範囲  
が陥没する。

「火器は論外、殴って壊すのも衝撃で爆発する可能性が有るから駄目……となるとやっぱりこの方法が一番かな」

そう言つて奏志は扉から30mほど離れて右手を扉に向け腰を落として構えを取り意識を集中する。

「……イマジンバンク 幻想書庫、アクセス。使用コード……アブソリュート・ゼロ 絶対零度砲……」

火器も衝撃も駄目ならば衝撃を与えずに凍らせるのみ!!

言葉を紡ぐと右手前方に青白い光の弾が出現しドンドン肥大していく。

「対象設定……前方金庫扉及び扉内部爆発物に限定……収束」

直径50cm程まで肥大した光弾は見る見るうちに小さくなり野球ボール程になる。

「構築完了……ファイヤ 発射ア！」

光弾は一瞬で亜音速まで加速し扉に着弾し見る見るうちに凍り付いていく。

「さてと、後は軽く振動を加えれば……ふんっ!!」

震脚を叩き込むと扉に亀裂が入りそこから砂のように崩れ落ちた。

壊れた扉の先には更に通路が続いており、その奥に今度は木製の扉があった。

「さーて中に何があんだろ？」

凍結させた爆薬の処理は一先ず後回しにして通路を進み扉を開ける。そこは上の保管室の様な大雑把なものでなく、保管物一つ一つがキチンと棚に納められていた。

「……本当に爺様は一体どこからこんなモン調達して来るんだ？」

納められているブツを見てそう言わずにはいらなかった。

何せ、そこに有るのは某青い槍兵が持つ槍だったり、時の番人の？？？がもつオリハルコン製の武器だったり、青い菱形の宝石とか赤い宝石の様な超高エネルギー結晶体だったり、機械的な兎耳の力チューシャだったり、螺旋模様の楯と突撃槍<sup>ランス</sup>だったり、三国最強の乙女武将が使う戟だったり、竜鳴館学園風紀委員長に代々受け継がれる日本刀だったり、最終幻想13の雷光さんの初期装備だったり、某野菜先生の物語に登場する魔法球だったり、炎髪灼眼の討ち手が身に纏うコートだったり、その他にも色々……

「分類したら魔術寄りののが大半……しかもロストログアまで紛れるというオマケ付き」

青い方は21個全部有るし赤い方も結構数が多い。暴走したら軽く地球が滅びるんですけど！？

心の中でそう叫んでいると棚から一枚の折り畳まれた紙が風の流れに乗ってこちらに飛んできた。それをキャッチして開くと……



ンでも受信してたのかな？」

まゝそんなトコじゃね？

「あれ、また電波が……って考えても仕方ない。一先ずはコイツ等を何とかしないと」

武器は夜笠に入れとくとしてジュエルシードとレリックは別荘に保管場所作るしかないな。

「となると先ずは別荘の調査からか……見た目はエヴァンジェリンのとソックリ、でも爺様の所有物が既製品な筈ないんだよね」

武器などを夜笠に仕舞い込んで身に纏い溜め息をつきながら別荘唯一の建造物がある場所へと入って行く。

〳〵別荘内、レーベンスシュルト城？〳〵

世界三大瀑布クラスの滝のど真ん中に造られた城から伸びる橋の先ある塔の上に奏志は降り立った。

「・・・これオリジナルと大分違うな」

確かに城の外観はオリジナルとほぼ同じ……しかし今居る場所から城までは原作は500m位だが

「1キロ以上ある上に城全体を囲む様にやたらと高い城壁があるし更に城は原作より遥かに大きい。しかも何かデカイのが二体、門番の如く両脇に控えてるし……」

城壁が300m位で第8ビオトープじゃあるまいとか門番がやたらとデカイとかそんな事はこの際どうでもいい。こいつ等みたいに他のエリアにも生物は居るだろうしゲートから迷い込んで城を荒らすとするのも居るかもしれないから荒らさない様に門番が居ても不思議は無い。問題なのは……

「龍樹や両面宿儺はやり過ぎでしょ（汗）」  
リョウメンスクナ

スクナは京都で封印されてんじゃないのか！？龍樹も帝都の守護は如何した！？

「グオオオオオオオ！！」  
「シギヤアアアア！！」

俺の声に反応したのか龍樹とスクナが吼える。

「えっ？スクナは爺様に此処の守護獣になる事を条件に封印を解かれて龍樹の方は爺様とケンカしてる内に意気投合して跡継ぎも丁度いい感じに成長したから引退して此処の守護聖獣に転職したあ！！？」



突っ込み処が満載過ぎるぞ！

というかそもそも爺様はどうやってネギまの世界に行ったんだ？此処には麻帆良学園都市も無いし京都に行った時も何も無かった筈なんだけど……

『そういえば奏志殿。陣内様に逢う時はいつも横にもう一人御老人が居りました』

龍樹の言葉が頭の中に響く。端から見ればただ吼えている様にしか見えないが奏志は特典の《世界中のありとあらゆる言語を日本語と同じ様に読み書き話せる様になる》で聴き取れているのだ。

と言っても動物相手だとその対象が高い知能を有している事が条件になる。今までに会話出来たのは犬・猫・チンパンジー・イルカ・鯨と後は鷹・鷲・梟といった猛禽類のみで蛇や蛙、その他多くの昆虫などとは会話が出来ない。その点、龍樹やスクナは全く大丈夫なので今後の奏志との会話は全て日本語になります。

「…まさかとは思うけどその老人って宝石剣持っていたりする？」

もし当たっているなら此処に有るもの全ての説明がつくのだが出来れば外れて欲しいな。

奏志はそう思った……だがしかし！こういう場においては外れて欲しい予想こそ当たってしまうものなのである。

『ええ、持っていましたよ』

やっぱしorz

『じゃが我等が此方に来てからは一度逢っておらんし陣内様も外の時間で10年程は逢って無いそうじゃぞ』

10年……俺が産まれて直ぐの頃からか。何か関係があるのか？

「居ないのならそれで良いや。居ても面倒事が増えるだけだし」

爺様一人でも大変なのにこれ以上力オスな状況は想像すらしたくないわ！！

「それで早速なんだけどこの城の中に書物つてある？爺様に剣術を教えて貰う事になったんだけどその基礎に保管室内の本全部読めって言われてさ。一応、ココも保管室の中に入るんだよね」

『そういう事でしたか。それならば城の中に案内を……と申し上げたいのですがこの城門を開ける訳にはいきません』

「どして？」

『それは“奏志が来たら最初の一回は城門を開けず自力で中に入らせよ”と陣内様に言われておるからじゃ』

あゝ成る程、これも修行の一環なのね。

「門を開けず自力で中には入るんだったらどんな手段使ってもいいのか？」

『城が崩壊しない程度でしたら』

俺が何をするか察したのか龍樹は条件付きで許可を出してきた。

「門を開けずにつてのが面倒なんだよな」

上を越えるか空間移動するか破壊するか位しか思いつかない。だが

……

「こんな壁登んの面倒臭いし空間移動は何か気分的に使いたくない  
……よし壊そう」

門の直ぐ横の壁まで移動してコンコンツ！と軽く叩く。

「（厚さは5mってどこか）あっ！訊き忘れてたけど中に誰か居たりする？」

『いや、中は無人じゃぞ』

それを聞いて安心したよ。さうてどうやって壊そうかな あれも良  
いしあれも捨て難い、けどやっぱり

「外から壊すより中からの方が簡単だよ……爆発の威力を調節し  
てっと！」

腕を中心に氣を纏わせる。

「ウォール……バスタアアア……！」

奏志の拳が城壁に突き刺さった。

## 第2話 ギャグパート？はい、そしてカオスな予感です（後書き）

奏志「おーい、約束通り逢いに来たぞー」

作者「よく来たな」

奏志「まあな、つーか終盤の方、何考えて書いたんだ？」

作者「深く考えずに書いてみたらこうなった」

奏志「考えずん……ってまあいいか。それでこれから如何するよ？」

作者「本当は読者の皆様からの質問なんかに答えたりするコーナーにしようかと思ってたんだけど……」

奏志「肝心の質問がまだ来ないと」

作者「そうなんだ。だから今回はこれでお開きかなあ」

奏志「なら最後にあれやんないとな」

作者「解ってる、せーの」

奏志・作者「この小説を読んで頂いている読者の皆様、有難う御座います。それではまた次回でお逢いしましょう」「」

作者「誤字・脱字・感想・質問など御座いましたらどうぞ」

奏志「そういう事は先に言っとけよ」

### 第3話 ギャグパート？はい、そして予感的中です（前書き）

作者「ちよつとカオスにし過ぎたかも？」

奏志「何で疑問形なんだよ」

作者「カオス過ぎとそうでないのとの基準がいまいち判らないから。それと相談があるんだが」

奏志「それは後書きでな。ではどうぞ！」

作者「……それ、俺のセリフ」

### 第3話 ギャグパート？はい、そして予感的中です

「ウォール……バスタアア……！！！」

拳を壁に叩き付ける……が壁は壊れる処か亀裂の一本すら入らない。

『如何したのです奏志殿？技は不発に終わったのですか？』

龍樹が問い掛けてくる。

「いや、ちゃんと発動したぞ」

その言葉と共に時間差で拳の接触部分から蜘蛛の巣状に縦横無尽に亀裂が入り風船が割れるかの如く弾け土煙が舞う。

「ウォールバスター……凝縮した氣を打ち込み内部で爆発させる事で標的を内側から破壊する技だ。爆発には指向性を持たせる事が出来るからこんな風に使用者に破片が飛ばない様にしたりも出来る」

煙が晴れると奏志の正面部分は亀裂こそ入ったものの原形を留めており、その周囲のみが粉々に砕けていた。

使う度に破片の散弾を喰らうのは嫌ヤだからな。

「まっ、それはさて置いて……おっじゃま」

軽い足取りで中へと入って行く。

トンネルを通り過ぎるとそこにはメインの城以外にも石造りの家や

工房、中華風の小さな城からコンクリートのビルまで古今東西のあらゆる建物があつた。

「……この光景を見て何も感じない自分が怖い」

慣れって恐ろしいよね（笑）

「あつ！忘れてた。おーい龍樹にスクナあ」

『如何しましたか奏志様？』

「聞き忘れてただけ魔法球の中と外の時間経過の差と体の老化を抑えるアイテムが有るかどうか教えて欲しいんだけど知ってる？」

『時間経過は中での2日が外での1時間じゃ。老化を抑えるアイテムは最上階にある宝物庫にありんす』

うげえ！？よりもよって一番上かよ。この城、グルメタワー並みの高さがあるから1200mってトコか？

「面倒臭いけどまあいいや。ありがとさん」

軽くお礼を言つて城に入る。

〃〃城内〃〃

中に入った奏志をまず出迎えたのは広いエントランスホール………  
…と此方に機銃を向けたオートマトンの群れだった。



「今度はダブルオー……キルモードになってないと有り難いけど今までの経験からすると期待するだけ無駄だろうな」

その予想は当たりオートマトン全機が一斉に機銃を撃ってきた。

「あぶねっ！」

開け放たれたままの扉に飛び移って初弾を回避し、夜笠から地獄蝶々取り出して抜刀の体制をとる。

「一気に終わらせる！万物、悉く切り刻め……」

練り上げた氣を全身に行き渡らせ……

「地獄蝶々！！」

一気にオートマトンの群れに突っ込みそのまま通り抜けた。オートマトンは奏志の速さに反応が追いつかないまでも軌道予測で奏志の位置を割り出しロックオンしようと機体を旋回させようとしている。

「無駄だ。貴様らはもう壊れている」

チンッ！

地獄蝶々を鞘に納める音と同時にオートマトンは全機三等分になって爆散した。

「居合い三枚下ろしてな。しっかしまあこの様子じゃこの先も罠があると思って動いた方がいいかな」

そう呟きながら階段を昇っていく奏志だがその後は何事も無く最上階まで到達した。

〳〵最上階、宝物庫前〳〵

「・・・・・・・・」

宝物庫を前にした奏志は呆れ果てた顔をしていた。何故ならば目の前にはある人物のホログラム映像が映し出されていたからだ。その人物とは……

「何で此处にティエリア・アーデがいるんだ？」

「気にするな。僕は気にしない」

「それキャラ違うくね？」

「気にするな。僕は気にしない」

あれ、無限ループ入った？

「いや、だからさ……」

「気にするな。でないと話が前に進まない」

あ、違った。

「なら気にしないことにする……でティエリアがホログラムで居るって事はまさかヴェーダまで有ったりする？」

「その通りだ……あと先に言っておくが僕とヴェーダが此処に居るのは君をこの世界へ転生させた者達の仕業だ」

なぬ？それってまさか……

「あの天使さんが？」

「そうだ。それともう一人、その天使の上司である神だ。詳しくはこのビデオレターを見る」

そう言つてティエリアは映像ファイルを再生した。

～～ファイル再生中～～

「このファイルを見ておるといふ事は魔法球の中に居るといふ事じやな。初めまして、君をすっかりミスで殺してしまい部下にたこ殴りにされた神（笑）でs……って何じゃそのカンペは！？」

「そんな事は如何でもいいですから早くして下さい！仕事が終わらなければ私が帰れないんですよ！！」

「……解ったわい（給料下げちゃおうかな？）」

神よ、そういう小言はせめてピンマイクのスイッチ切ってから言えよ。でないと……

「全部マイク拾ってますよ。私が肩代わりしている仕事分返しましょうか？」

ほら、やっぱ聴こえてた。

「すみませんでしたorz」

土下座しちゃったよこの神（笑）。しかも立ってる状態から僅か0.001秒って早っ！？

「土下座して頂かなくて結構なので早く収録終わらせて仕事して下さい」

映ってないけどこの声ってあの天使さんだよね？すんげー毒舌。

「……はい。コホン、という事で権限を部下に与えて君をその世界へ転生させた訳じゃが……流石に権限を与えるだけで元凶のワシが何もしないのもあれなのでワシが愛読書とゲームを基礎にして趣味で創った魔法球とその管理にヴェーダをプレゼントしてみました」

いや、プレゼントしてみましたって元の世界が大混乱しているのでは？

「今、元の世界が混乱してるんじゃない？とか思ったじゃろ。じゃが心配無用！そのヴェーダはオリジナルを元にわしが創造したから混乱は起きとらんよ」

見る側の考えを予測して録画するってアンタはル〇ーシュですか！？

「今度はアンタはルーシュかって思ったじゃろ？残っ念でした。アニメを見て真似しただけじゃ……とまあ、部下のオーラが段々禍々しくなって来たのでこの辺で終わりにする。最後にわしが言えた事ではないが二度めの人生噛みしめて生きるとええ。さらばじゃ！」

くく再生終了くく

「……なんか突っ込みどころ満載なビデオレターだな」

「それは今更だから言わない方が精神的にはいいぞ。それと……」

「どした？」

首を傾げながらティエリアを見る。

「君は僕を知っているみたいだが僕は君を知らない。自己紹介してくれないか？」

「そついやまだしてなかったな。俺の名は奏志、鉄奏志だ。宜しくティエリア」

「ティエリア・アーデだ。此方こそ宜しく頼む。そしてこれが老化を抑えるネックレスだ」

自己紹介を終え老化防止のネックレスを受け取ったところで奏志はある相談と確認をティエリアにした。

「そついやティエリアに訊きたい事が幾つか有るんだが良いか？」

「時間が掛かるなら下の談話室に移動するか？」

「そうするわ。此処に着くまで神経張り詰めて無駄に疲れた」

「……理由を訊いても良いか？」

「キルモードのオートマトン三枚に下ろしてから他に畏がないか警戒してた」

横目で見るとティエリアは眼を見開いて驚愕の表情を浮かべていた。

「あれの設定変更は龍樹とスクナに一任していたがまさかいきなりキルモードに変更するとは……君はバグか？」

成る程、犯人はあいつ等か。まあ後でボコるとして……

「それにプラスしてチートな……魔術師からすれば俺って幻想殺し  
イマジネーション  
並みかそれ以上の天敵だし」

「そう言えばそうだったな……と着いたぞ」

雑談をしているうちに談話室に到着した。扉を開け中に入りソファに腰掛ける。

「それで訊きたい事とは何だ？」

「まずこの別荘にはどんなエリアがある？」

「この城を含めて現時点で転送ポートを設置しているエリアの数は

大まかに分類して海や空、凍土などの10ヶ所だがそれで全てでは無い」

「どういう事？」

10のエリアでも多いと思うんだが……

何時の間にかテーブルに置いてあった紅茶を飲む。

「エリアの探査には自律行動型の機体を使っているのだがそれでは侵入出来ない場所がある。試しに僕が遠隔操作で入ろうとしたら境界線を越えた瞬間に機体を粉々にされてしまった」

境界線を越えた瞬間に粉々つて超重力で押し潰されでもしたか？

「そのエリアは俺が時間ある時にでも探索するとして次の質問なんだが」

「何だ？」

「ティエリアも含めてだがどの時点までのデータが有る？」

「機体データは全種類、その他医療機器や戦艦、あとは探索済みエリアに生息する生物や狩りに必要な道具のデータなどだな」

「ティエリア、データがあるって事はそれ等を製造する事も可能って事だよな？」

「必要性が無かったので封印してはいるがオリジナルの太陽炉を除いて製造可能だ」

あゝやっぱ太陽炉は木星でなければ造れないか。でもちよつと待てよ？もしかしたらあれが動力源に使えるか、んでもってあれを使えば小型かも出来るかもしれないな。よし造ろう！でも先に……

「それじゃティエリア、今後必要になるから一先ずは再生治療用機器の製造を最優先事項でお願い」

「了解だ……ところで48時間経たないと別荘からは出られないのだが奏志はどうやって過ごす？因みにこの城に食料の備蓄は全く無い。紅茶や珈琲のストックが少しある程度だ」

参ったな。流石に丸二日飯抜きは流石にキツイ。何処かで食料を調達しないと……

「ティエリア、徒歩二日で往復可能な範囲で一番危険度が低いエリアって何処？」

「それならこのエリア3だな。温暖な気候と豊富な食料、原生生物の危険度も最高で捕獲レベル3程度だ」

「（城壁見た時から薄々感じてはいたがやっぱりトリコだったか）そんじゃそのエリアで決定。二日経ったら戻るから後の事よろしくね」

そう言い残し奏志は開け放たれた窓からピョン！と飛び降りた。それを見たティエリアは……

「幾ら降りて来たといえここはビルの二百階に相当する高さなのだが……まあ彼なら大丈夫か」



凄く冷静でした。

一方で飛び降りた奏志はといえば……………

「うーん、勢いでつい飛び降りたけど着地どうしょ？」

上下逆さまの状態で胡坐を搔いて悩んでいた……っていうかそんな時間無えだろ！？

「考えてる時間無いし怪我すんのも嫌だし能力使って何とかしよ。幻想書庫、アクセス……」

身体を水平にして落下の勢いを殺しつつ能力発動のキーワードを紡ぐ。

「使用コード、四天王サニー」

能力発動と同時に奏志の髪が輝き出し、短く切り揃えられた黒髪から自身の身長ほどに長くなり色も青・ピンク・緑・白の4色に変化した。

「んでもって髪<sup>ヘア</sup>ネット！」

触角を網目状に展開して落下の勢いを完全に相殺して城壁の上……丁度、龍樹とスクナのまん前に着地する。飯食いに行く前にこれやつかないとな。

「さてお前ら、俺が何を言いたいか判ってるよな？」

『な、何の事じゃ？』

『思い当たるフシは無いのですが』

あくまでシラを切るか。

「キルモードのオートマトン」

『『ギクッ！』』

擬音が口から漏れてるよこいつ等。

「設定変更はお前らがティエリアから一任されている」

『『ギクギクッ！！』』

「ティエリアの言葉から複数のモードが有るにも関わらずいきなりキルモードに設定」

『『……………』』

あらら、黙っちゃったよ。

「O H A N A S H I する？」

『『スミマセンでしたあああ！！！』』

おーおー、揃って土下座したよ。素直に謝ったからO H A N A

S H Iは勘弁してやるか。

「宜しい、それじゃお仕置きに拳骨一回な」

『『優しくして下さいね』』

「うんそれ無理」

城壁から跳んで拳に氣を纏わせ更に触角を操りながら二体に接近する。そして二体の間を通過する瞬間に……

「右！羅漢適当に右パンチ！！。左！20万本髪<sup>ヘア</sup>パンチ！！」

ドゴン！！ズドン！！

適当に制裁を下しそのまま転送ポートに着地する。龍樹達は殴られた衝撃で頭を地面にめり込ませてリアル犬神家状態になっていた。

「あつ、入る時に壊した壁と陥没した地面直しといてね」

そう言い残して奏志は城を後にした。この後、やっぱり心配になって様子を見に来たティエリアがマンガやアニメでしか見れない様なタンコブを擦りながら涙目で修復作業をしている龍樹とスクナを見たとか見なかったとか………

### 第3話 ギャグパート？はい、そして予感的中です（後書き）

奏志「作者よ、やっぱこれはカオス過ぎじゃね？」

作者「やっぱそうかな？けど折角ロストログアがあるんだから使いたいんだよ。そして幾つかの作品で悩んだ末にヴェーダになったんだよ」

奏志「そういう事ね。それで相談があるって言ってたが何なんだ？」

作者「実はさ、修行編ってつけてるけどこのまま修行編を続けるか魔法球から出た時点でキンクリして学園都市に行くかで迷ってた」

奏志「単刀直入に言うとも早くもストック分が尽きたと」

作者「実はその通りで」

奏志「やっぱりか……因みにキンクリしたら修行編はどうなるんだ？」

作者「一応、本編中で回想シーンとして書く予定です」

奏志「なら良いんじゃないの？でも俺らだけで勝手に決めんのはいいだけねーから読者の皆様にアンケートする事を薦めるぞ」

作者「やっぱりそれが最良だよな。という訳でアンケートを採りたいと思います。内容は以下の通りです」

？このまま修行編を続ける

？キンクリして原作突入

？作者の気分にお任せします

作者「この三つの中から選んで投票をお願いします。投票期限は1月7日までとさせて頂きます」

奏志「一応聞いておくがもし投票が一通も来なかったらどうする積もりなんだ？」

作者「それはその時に考えるよ。それよりもそろそろ時間が無くなつて来たぞ」

奏志「そんじゃ最後にあれやりますか。今度はヘマすんじゃねーぞ」

作者「だから原稿書いて来た。はいこれ、せーの」

奏志・作者「この小説を読んで頂いている読者の皆様、お氣に入り登録して下さいました皆様、本当に有難う御座います。誤字・脱字・感想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。それではまた次回お逢いしましょう」「」

ティエリア「キンクリすると僕の出番は如何なるんだ？」

作者「ちゃんとあるから心配すんな」

## 主人公設定1（前書き）

それではどうぞ

## 主人公設定1

作者「さて奏志君、早速だが今回は君の現時点での情報の開示と能力の一部紹介をしようと思う」

奏志「別に構わないけどよお、ついウツカリでネタバレし過ぎんないよ?」

ティエリア「ネタバレし過ぎそうになったらその時は僕が君を討つ」  
作者「おー怖ッ!なら口を滑らさない様気をつけて始めるとしよう。  
まずは奏志の基礎情報から」

名前：鉄くろがね 奏志そうし

年齢：10歳      身長：現在145cm      体重：現在50kg

血液型：A型      視力：5・0（10・0）

ステータス：テイルズ風      ランクはE↘EXで表記。一般成人男性はCランク、聖人で大体Sランク

腕力：B+（SS+）      体力：AA（???）

知力：AAAA+      精神：B↘SS

敏捷：AAAA（SS-）      器用：S+（SS）



氣量：SSS（時限EX、その後E）

作者「まっ、こんな所か」

奏志「括弧の中のランクはどういう意味何だ？」

ティ「氣量以外は氣による強化後のランクだ。氣量については今は話せない……が時間制限付きでのランクアップとその後のランクダウンで見当はつけやすいだろう」

奏志「成る程な。にしても聖人でSランクってEXランクなんて居んのか？」

作者「それが居るんだよ。お前の爺さんの鉄陣内は上のステータスの知力と器用以外が全部EXなんだよ」

奏志「マジかよ！？ってか何で知力と器用はEXじゃないんだ？」

作者「知力は単純にEX取るにはこの世の全ての事を知らなきゃいけないから、器用は小細工する時間が有るならその間にぶっ飛ばせ！って言う人だからだ」

奏志「あゝ何か納得。因みにそれを踏まえた上での爺様のその二つのランクって？」

作者「……知力がSSSで器用がSSS」

奏志「……………」

ティ「……………」

作者「……………」

奏志「……勝てる人間いんの？」

作者「……さて次は能力関係だな」

奏志「スルーですか」

・カオティック・リアル  
混沌とした実在

作者「これは一言で言ってしまうえば全ての魔力や術式を中和してしまう能力だ」

奏志「上条さんのイマジンブレイカーの幻想殺しと似てないか？」

作者「確かに似ているが違う部分もある」

奏志「例えばどんな所だ？」

作者「先ず第一に能力の発現範囲だ。幻想殺しが右手限定なのに対して混沌とした実在は全身で能力を使用する事が出来る。第二に、そこから先は禁則事項です」……ティエリア、合成音声使ってそのセリフは正直キモイぞ」

ティ「（ブチッ！）ハイパーバースト完全解放！！」

作者「えっ！何でセラヴィーに乗っくぎに」やあああああああ！

！  
」

奏志「あらう作者が見事コンガリと黒焦げになっちゃってまあ…  
…思っても口にしちゃいけない事もあるだ」奏志も黒焦げにな  
りたいのか？」イイエ、エンリヨシマス」

ティ「懸命な判断だな。それでは作者が消し炭になってしまったの  
で此処からは僕が司会進行をしよう」

奏志「それは良いがこれ如何すんだ？」

ティ「次はこれだ」

奏志「こつちもスルーですか」

イマジンバンク  
・幻想書庫

ティ「この能力の特徴は、それは俺に言わせてくれないかティエリ  
ア」…まあいいだろう」

奏志「あんがとさん この能力はプロローグで言っただ様に自身の記  
憶している情報を具現化する能力だ。またその性質上、記憶してい  
る情報量によって強さが変化するという一面を持っている」

ティ「だが奏志は完全記憶能力を貰っているのだろうか？」

奏志「だから記憶喪失にでもならない限り弱くなる事はまず無いと  
言っているだろうね」

ティ「奏志、それはフラグではないのか」

作者「今回の雑談部分は本編とは関係無いから問題ない」

奏志「あつ復活した」

ティ「再生治療の理論的限界値を超えているだろ!？」

作者「ご都合主義バンザイ」

ティ&奏志「ウザッ!」

作者「あんまそういう事言ってつと主人公でも遠慮なく出番減らすよ?それにティエリアにはレギュラー入り考えてたんだけどヤメよっかな」

ティ&奏志「スミマセンでしたああああ!!」 or z

作者「よろしい。んじゃこれ以上はネタバレになりそうだしそもそも主人公設定つて回だからそろそろ終わりにする?」

奏志「それもそうだな」

ティ「主人公設定と言いつつ半分近く雑談になってた気がしないでもないのだが……」

作者「冒頭で能力の紹介は一部に限定してるから良いんだよ。それにここで喋り尽くすより本編で少しずつバラして行きたいしさ」

ティ「確かに一理あるな」

作者「だろ？それじゃ今回は後書きは休みだから此処でやるぞ！せいの」

作者&奏志&ティ「この小説を読んで頂いている読者の皆様、お気に入り登録して下さいました皆様、本当に有難う御座います。誤字・脱字・感想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。それではまた次回お逢いしましょう」「」

アンケート途中経過

? 1 票

? 2 票

? 0 票

作者「一先ず投票者数ゼロは回避出来た」

奏志「よかったな」

主人公設定1（後書き）

||  
||  
||  
||  
||

休業日

||  
||  
||  
||  
||

#### 第4話 ギャグパート? いいえ、何気で初の戦闘シーンとアンケート結果発表で

作者「奏志!後書きでアンケート結果発表するぞ」

奏志「おうよ!でもその前にまずは本編だ」

奏志&作者「それではどうぞ」



#### 第4話 ギャグパート？いいえ、何気で初の戦闘シーンとアンケート結果発表で

転送ポートを抜けた奏志がまず最初に目にしたのは南国のリゾートをイメージさせる様な浜辺だった。青い空に白い雲、目の前には穏やかな海と後ろには広大な森が広がっている。此处だけを切り取って見れば楽園と呼べなくも無い。だが……

「それでも捕獲レベル3の猛獣が居る危険区なんだよな」

捕獲レベル。

I G O（国際グルメ機関）が定める獲物を仕留める難度を表すものでレベルが高いほど難しい。捕獲レベル1が猟銃を持ったプロの狩<sup>ハンター</sup>人が10人がかりでやっと仕留められるレベルだ。

「捕獲レベル3は歩兵30人で漸く仕留められるレベル、確かバロンタイガーやハングリラ鳥がそうだったな」

そう呟きながら森の中を進む。生い茂る木々の間を潜り抜け、流れの急な川を飛び越え、足場になる突起が全く無い高さ300mほどの崖を髪を操り登って行く。

「あゝ美味そう匂いしてきた」

崖の頂上に近付くほど匂いはまるで香水を何度も吹き付けたかの如く強くなっていく……しかし顔をしかめる様な刺激臭ではなく、寧ろ嗅げば嗅ぐほど食欲が増していく様な感じだ。

「やっぱこの上に食材があんのは間違い無いみたいだな。早く食い

てえな」

美味しい物を食いたいという純粋な欲求から登る速度を更に上げる。

「到着う！つて…ゴク…さつきから唾液が…ゴク…止まんねえ！！」

口の中で唾液が物凄い勢いで分泌されていく。生前まえにも美味しい物を目の前にすると唾液が止まらなくなる事はあったがこれは桁が違う。例えるなら水道の蛇口を全開にするのとダムの放流との差はあるだろう。

「もう我慢出来ない！それでは早速……」

両手を合わせてお辞儀する。

「この世の全ての食材に感謝を込めて…いただきます」

一番手近な所にある骨の木になっている肉を手にとる。

「しかし何がどうなったら肉の実なんて出来るんだろう？」

まじまじと肉を見ながら不思議に思う奏志。

「まあ結構何でも有りの世界だから気にするだけ無駄か（あむっ）」

モグモムモキュモム……ゴクン！

齧りついたひと口を飲み込んだその瞬間、奏志は動きを止め空を仰ぎ見た。その目から一筋の涙が零れ落ちる。

「……うめえ！3ヶ月振りのまともな飯うめエー！」

そりゃあお前、3ヶ月間力　リー○イトや錠剤のサプリメントばっかだったら美味いだろうさ。

「これからは面倒臭くても料理はしよ…おっ！アーモンドキャベツ見つけ　（バリ）」

バリバリとアーモンドキャベツを丸齧りしていく。

「噛めば噛むほどアーモンドの味と香りが増していき、それでいて飲み込めばキャベツのようなサッパリとした後味、うめエー！」

確かに美味そうだ。けど気をつけるよ奏志、アーモンドキャベツはその名にある通りアーモンド並みの高カロリーだから食べ過ぎるとあつという間に太るぞ。

バリバリムゲ……ムゲ…モキュモキュ……

天の声が届いたのか奏志の食べるペースが若干落ちる。そんな奏志を周囲の森から24の瞳が睨み付けていた。

「ったく、人が食事してる時に香ばしい香り漂わせながら威嚇してくる食材<sup>ヤツ</sup>はなんだあ？（ジュルリ）」

そんな奏志の疑問に答える様に瞳の主達は木の陰から出て正体を現した。背中の部分が焼かれている豚だった。

「マルヤキブタ……ここはお前らの縄張りだったのか、差し詰め縄張りを犯した俺にヤキを入れに来たってトコか。丁度良い、これで

「二日分の食料が確保出来る」

立ち上がり食べ終わった肉の実の芯（いや骨か？）をポイツと投げ捨てる。

「さーで、捕獲レベル1なら武器も能力も使う必要は無いな。久し振りにケンカもしたいしケンカで武器を使うのは野暮ってもんだ」

あくまで俺の考え方ではだがな！！

ポキポキと関節を鳴らしながら能力を解除して四肢に氣を充填しケンカの準備をする。

『ブオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

1頭のマルヤキブタが雄叫びと共に一斉に突進して来た。それをジャンプして避け一体の眉間を殴る。

『ギユオオオオ……オ……』

殴られたマルヤキブタは断末魔の叫びを上げてその場に崩れ落ちて動かなくなった。

「次イ！」

仕留めたのを確信した奏志は次の獲物<sup>ターゲット</sup>へ意識を向ける。仲間が死んだのを見た他のマルヤキブタ達から何やら焦げ臭いにおいが漂ってくる。

「やっば！マルヤキブタは怒らせると熱くなって身が焼け焦げちま

うんだった。アニメじゃこの位じゃ怒らなかったのに……こうなったら爺様から教わった技使って一気に倒すしか無いじゃん」

地面を強く蹴って先程より高く飛び11頭のマルヤキブタを視界に捉え、先端がダガーナイフの様に尖っているピンポン球サイズの氣の弾丸を周囲に配置する。(見た目的にはKY執務官のスティンガーブレイドかダメットさんのフラガラック)

「獲物が粉々にならない様に爆発性能を排除して貫通特化に……鉄流、拳骨砲弾！」

拳を振り抜くとそのモーションに誤差も無く連動して撃ち出された11の弾丸が全てのマルヤキブタの額に突き刺さり絶命させた。

着地した奏志は再び手を合わせてお辞儀する。

「ごちそうさまでした」

頭を上げて地面に亀裂が入ってるのを見た奏志はポリポリと頬をかいた。

「ヤベ、やり過ぎた」

何故、奏志はそう呟いたのか……それは奏志の立ち位置にある。奏志は崖を登って直ぐの所で食事を始めた。マルヤキブタが出て来たのは崖の反対側の森。此方は殆ど移動せず相手が接近して来た所を仕留めた。相手を貫通した弾丸が地面も貫通。地面にヒビが入る。つまりは崖崩れ一步手前の状態。

「崩れる前に早いとこマルヤキブタ持って帰ろ。えーと、最初に居

た浜辺は……あの辺りか。幻想書庫、アクセス。使用コード、四天王サニー」

触角を使って12頭のマルヤキブタを持ち上げ浜辺の方角にぶん投げた。

「さて次は俺だ」

崖の側面に移動する。そして……

「足に気を集中させて……縮地无疆!!」

超長距離瞬動術を使って壁を蹴り先に投げたマルヤキブタを追い越して浜辺に着地する。

「んでもって髪ネットでキャッチしてっ」と!

マルヤキブタをキャッチした奏志はそのまま転送ポートへと入り城へ戻った。

その頃、城では……

『ふう〜やっと修復が終わりました』

『後はセメントが乾くのを待つだけじゃな』

壁の修復を終えた二体がお茶を啜っていた。

「たっだいまゝ、お土産狩って来たぞ」

『『あ、お帰りなさい奏志様』』

「お！壁が直ってる。けどそのデカさでよく修理出来たな、しかもこんな短時間で……」

俺が居なかったのって大体4時間位なんだよな。

『『大変でした。次からは絶対に壊さないで下さいね』』

「いや俺も城に入る度に壁壊したりしないから……それよりこれ土産ね。お前らにしたら量が少ないかもしれないけど」

獲ってきたマルヤキブタを半分渡す。

『『お土産のレベルを超えている気がします（するのじゃ）』』

「いらないの？」

『『いえ、いただきます』』

「そうそう、俺の前では素直が一番だぞ」

ハッハッハッと笑いながら奏志は門をくぐって城に入った。

「そついやこの城って……訊いた方が速いな。ティエリアー！」

思い立ったが吉日、直ぐにティエリアを呼んだ。

「いきなり大声を出してどうした？」

「この城に厨房っていうか食料の保管設備ってある？」

「それならこっちだ」

ティエリアの後に続いて城の中を進み一番奥の扉を開けると部屋全体に大小様々なグルメケースや冷蔵・冷凍庫がズラツと並んでいた。壁には包丁やフライパンといった調理器具が吊り下げられている。

「……どこのレストランの厨房だよ」

思わずそんな言葉が零れる。

「今まで誰も使う事が無かったのだが整備は完璧にされているから安心して使うといい」

「そうか、なら遠慮無く使わせて貰うよ。一先ずこいつ等を解体しないとな」

マルヤキブタを調理台に置き包丁で部位別に切り分ける。

「よつと！一体はこれで良し。もう一体はこのまま切って食べよ」  
奏志、食べる前にデータを取らせて欲しいのだが「……別に良いけど何で？（モグモグ）」



切り分けた肉を食べながら話を聞く。

「ヴェーダには捕獲レベルや生息地といったデータは有るが味に関するデータは皆無だ。より完璧なデータベースを作るには味の情報は必要不可欠な物だからだ」

成る程、確かに味は重要な要素だよな。（モグモグ）

「俺が食べて憶えた記憶を情報として記録してもいいけど何時も此処に居るってわけでも無いしさ、ティエリアが自分の体作って食べた方が早くないか？ヴェーダとリンクも出来るんなら手間も掛からないし二人で食べると作業効率も上がる。（モグモグ）」

「確かに一理ある。では再生治療機器と平行して僕の体の製作に入るとしよう（じゅるり）」

ティエリアは奏志に背を向けて部屋を出ようとする。

「（あれ？今、ティエリアが涎を垂らしてたような……まあいつか）ティエリア、この城に本ってあるか？」

「いや僕の知る限りは一冊も無い」

「無いなら無いで別に構わないんだ。地下室の本を全部読まなきゃ剣を教えて貰えなくてね、全部読み終わったらこのボタンを押す事になってる。あっこれマルヤキブタの味のデータ」

能力で味の記憶をデータ化したファイルを作りティエリアに渡す。ティエリアはそのデータを持って鼻唄を歌いながらスキップで部屋を出て行った。

「どんだけ嬉しいんだよ、そしてごちそうさまでした（ゲプッ）」

食事を終えた奏志は調理器具を片付けて部屋を後にする。そして部屋にはマルヤキブタの骨格標本だけが残された。

そして少しばかり時は流れ……

「そろそろ中に入ってから48時間が経つな」

漸く魔法球から出られる時間になった。

「装置が完成したら奏志の携帯に連絡する」

「頼むよ、それと食材見つけたら出来るだけ捕獲しといてくれる？  
流石に毎日とはいかないと思うけどなティエリアの身体が完成する  
まではなるべく来るようにするからさ」

「了解だ。奏志も安心して修行に励むといい」

「勿論だ。それと外に戻ったら爺様の仕掛けた爆薬を此処に送るから全部処分していくくない？」

「???構わないがどの位の量があるんだ？」

あゝやっぱりそれ訊いて来るか。説明すんのメンドクサイし丸投げしよ。

「TNTが100トン、任せたよ」(ヒュン！)

逃げる様に魔法球から外に出る。量を聞いたティエリアは目が点になっていた。

#### 第4話 ギャグパート? いいえ、何気で初の戦闘シーンとアンケート結果発表で

奏志「で、アンケート結果はどうなったんだ?」

作者「うん、最終的にこうなった」

? 1票

? 2票

? 0票

作者「以上の結果から?のキンクリに決定しました」

奏志「なら次はもう学園都市の中なのか?」

ティ「それはどうだろうな」

奏志「えっ!? ティエリア、それというk「作者、そろそろ終わりにしよう」って聞けよ!」

作者「それじゃあ最後のあれやるぞ。せゝの」

三人「この小説を読んで頂いている読者の皆様、お気に入り登録して下さいました皆様、アンケートにご投票頂きましたアポリオン様・七夜和様・コー様、本当に有難う御座います。誤字・脱字・感想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。それではまた次回お逢いしましょう」「」

奏志「で結局のところ、次回はまだ学園都市じゃないの？」

ティ「それ以上は軽くネタバレだ！ハイパーバースト完全解放！！」

奏志「ちょ！？それは反sぎに」やあああああ！！」

ティ「まったく、ネタバレの恐怖は前回で分かっていただろうに…  
…それと食材の解説などは作者の独自解釈だから気にするな。僕は

「気にしない」

## 第5話 原作初介入 前編（前書き）

奏志「前後編に分けた理由って何なんだ？」

作者「俺、1話辺りの目安を4000〜5000字にしてるんだけど分けないと10000字近くになりそうなんだにや〜」

奏志「成る程、ああそれから少し意外な展開があるって聞いたんだが？」

ティ「それは読んでみてのお楽しみだ」

三人「ではどうぞ」

## 第5話 原作初介入 前編

初めて魔法球に足を踏み入れてから早5年の月日が流れた。あの後、爺様を呼んで剣を教えて貰ったのだが呼び出しボタンの音声が『お仕置きだべ〜』だった時は思わず足を滑らせたのは今となつては良い思い出だ。

「奏志、そろそろ学園都市に行きたくはならんか？」

ツルン！

パシッ！

思わず落としそうになった皿を髪でキャッチする。えっ？爺様の前で能力使ってもいいのか？剣の修行が始まったその日にバレてましたが何か？

俺もビックリしたさ。でもまあ「奏志、お前何か隠し事しとるじゃろ？」って言いながら真剣片手に近付いて来たら話すしか無いでしょうよ。しかも隠し事に気付いた理由が「勘じゃ！」だもんな。それから隠してる事洗いざらい白状させられ、その上で「例え血の繋がりは無くともどんな状況にあるうともお前は正真正銘ワシの家族じゃ！」って言うてくれた時は涙が止まらなくなっただね。

「確かにそろそろ行きたいとは思ってたけど唐突に如何したの？」

皿を食器棚に戻しながら尋ねる。

「実はこの間、学園都市にいる古い友人に電話して奏志が学園都市



に行きたがつてゐるって伝えたら」

「（古い友人って相手何歳だよ！）伝えたら？」

「『ふむ、時期が中途半端だが転入生として迎え入れる準備をしておこう。それにしてもお前が子どもを育てるとは……興味深い』と言つておつた」

あれ？何か話し方が特徴的な気が……

「それで転入時期は何時頃に？」

「明日」

マジ？いくら何でもそれは……

「早すぎでしょ！？直ぐに準備始めないと間に合わないじゃん」

「なら早く準備するんじゃない。それとこの家暫く空き家になるから地下にあるブツは全部持つていくんじゃないぞ」

「うつへえ……更に仕事増えた」

愚痴を言いながら引越し作業に取り掛かる奏志だった。最も、引越し作業と言っても地下に有る物を片っ端から夜笠に入れていくだけなのだが何せ量が多い。本だけで軽く十万冊を越え、毒蛇毒虫の処理もしなきゃならんし、『立つ鳥跡を濁さず』という様に掃除もしなければいけない……というか掃除が一番時間が掛かる。

「いつその事コンクリ流し込んで全部塞いじまう……いや、そっちの

方が時間掛かるか、はあ」

溜め息を吐きながら掃除を始める奏志、今夜は徹夜になりそうだ。

翌日。

「そんじゃ爺様、そろそろ行くわ」

「日々の鍛練を怠ってはならぬぞ」

あいよ、と軽く返事を返し自宅前のバス停から学園都市方面行きに乗り込む。一時間ほどバスに揺られていると……

「次は終点、西口公園前、西口公園前で御座います」

「やっと到着か」

ゴキゴキつと首を鳴らし荷物を持ってバスを降りるとゲートの方へ歩きゲートに居る係員に予め送られてきていた通行許可証を見せる。

「はい、確認しました。案内人の到着が少々遅れていますので到着するまでこちらの部屋でお待ち下さい」

そう言つて案内されたのは休憩室と思わしき部屋だった。部屋の扉には大きく『禁煙！』の紙が貼り付けられていた…がどうやらこれは最近になって貼り付けられた様だ。その証拠にソファや壁から微かに煙草の臭いが漂つてきている。

係員が出て行くと奏志はソファに座り懷から本を取り出して読み始めた。

「……………」

エアコンと空気清浄機の音だけが室内に響く。

「…………そろそろ黙つて突つ立つてるのも飽きて来たんじゃない？」

奏志以外誰も居ないはずの場所でそう呟く。返事は勿論……

「何時から気付いてたじゃんよ？」

帰ってくる。振り向くとそこには上下緑のジャージを着ており、髪は後ろで纏めているだけの大雑把な格好をした巨乳の「くじちゃん」という言葉を多用するシリアルをコミカルに始末する警備員アンチスキルの元お

隣さんが居た。

「何時からって言われたら『約束の時間に遅れてるじゃん!』って言いながら車をスピンターンで駐車スペースに停めたところ辺からだけど?」

それを聞いたジャージの女性は冷や汗を流した。

「あ、相変わらずというか更に強化してるじゃん。奏志の地獄耳」

「そういう愛穂姉は昔とちっとも変わって無いよな、その性格とかプロポーシヨンと…いや、更に大きくなった?」

ナチュラルにセクハラ発言をする奏志。普通ならビンタされても文句は言えないのだがこの人に限ってはその心配は無い。何せ……

「なんだ奏志、そんなに気になるのか。ホレホレ」

などと言いながら俺を抱き締めるのだから……っーか窒息する。

「愛穂姉、そろそろ離して」

背中をタップすると漸く解放された。

「悪かったじゃん、けど2年振りの再会なんだからこれ位許容範囲じゃん」

その許容範囲で過去に何回死に掛けた事か。

「まあ昔より更に鍛えてるから大丈夫だけどさ……それよりも俺の

住む場所って何処になるの？この紙には家具家電は全部此方で用意しますって書いてあるけど」

「それは着いてからの楽しみじゃん　じゃあ早速行こうか」

俺の首根っこを掴んでズンズンと歩いていく愛穂姉。すれ違う人も俺との関係を知っているのか誰も気にしていない様子だ。

車に乗せられ走り出して直ぐに奏志は住居の他にもう一つ疑問に思っていた事を口にする。

「住む場所もそうだけど俺の通う学校って知らされて無いんだけど何処になるの？」

「学校は柵川中学に通う事になる。高校は私にも知らされて無いじゃん」

そっか、なら後で知ってる人に聞きに行こう。

「それにしても」

「どしたの？」

「随分と髪が伸びてるじゃん」

まあ確かにサニー位の長さが有るからな、でもこの髪……

「すぐこの長さに戻るけどやっぱり切った方が良い？」

サニーの能力使うと何故か直ぐ伸びちまうんだよね、なら使わな

きやいい事じゃね？と思った時期も有ったが日常生活では複数の作業を同時にこなせて重宝してるから今更使わないなんて選択肢は存在しないのよな。

「いや、sonだけツヤツヤな髪を切るのは勿体無いじゃん。それに何か言われたら今言った説明をすれば大丈夫じゃんよ」

そんなこんなで雑談をしながら車を走らせる事20分、俺の住まいとなる場所に到着した……のはいいんだが

「なにこのたった一人の学生には分不相応な一軒家は？」

目の前には屋根にソーラーパネル、庭には風力発電システムが装備された二階建ての家が建っている。

「奏志は転入時期が中途半端だったから学生寮が用意出来なかったじゃん。そこで特別に実験協力名目で最新鋭設備が満載された住居（一軒家タイプ）が提供されたじゃん」

ホント特別扱いもいい所だな……まっ、誰の差し金かは想像つく。

「多分爺様が根回ししたんだろうね。俺が学園都市に行きたいって呟いたの聞いて全部の手続きしちゃう位だし」

「あゝその様子じゃ陣内さんの方も相変わらずみたいじゃん」

そりゃそうだ。あの爺様の性格が変わるなんて事があつたら俺は天変地異の前触れかと疑うね。

「まあね、それより外は寒いから中に入んない？」

現在の季節は冬、幾ら日中といっても気温は一桁台なので普通の人にとってはそこそこ寒い。俺は氣で体温を保っているので寒くない……流石に極地に行く時はライタースーツ着るけど。

「確かに今日はこの冬一番の冷え込みって言うてたじゃん」

ブルブルと身体を震わせている愛穂姉を連れて中に入る。中は暖房が効いていてとても暖かった。

「愛穂姉、インスタントでよければコーヒー淹れるけど飲む？」

「頂くじゃん」

ヤカンに水を入れ火にかけ……ずに両手で挟み込む様にして掴み手から氣を送り込んで熱エネルギーに変換して湯を沸かす。一瞬にして沸騰したお湯をコップに注ぎ軽やかき混ぜてから愛穂姉に渡した。

「はあゝ温まるじゃん」

仕事上がりの銭湯で湯に浸かった時のような顔でまったりとくつろぐ愛穂姉。

「これから外出するけど愛穂姉は如何する？まだ暫く居るなら家の鍵は預けたままにしとくけど」

「いや、これ飲み終えたら仕事に戻るじゃん。実を言うとパトロールの休憩時間に迎えに来たからそろそろ戻らないとまた小言をネチネチと言われるんだよ」

グビツ！とコーヒを一気に飲み干した愛穂姉は俺に家の鍵と必要書類を渡して仕事に戻っていった。

「さて、俺もさっさと出かけよ」

玄関に鍵を掛け街に繰り出す。先ずは郵便局だ。

「郵便局発っけ…ん？」

街を歩き回る事15分、学園都市の地理をまだ把握していない奏志は通行人に郵便局のある方角を尋ね、その方角へ向けてビルなどの障害物を全て飛び越える事5分、漸く郵便局を見つけた奏志は人の



居ない場所に着地しようとしたのだが何か様子がおかしい事に気づいた。

「防犯シャッターが閉まっててその前で花飾りのカチューシャをつけた女の子が助けを求めてるな」

確か原作の中に……そうだ！超電磁砲の番外編の郵便局強盗だ！！時期が分からないイベントだったから如何しようかと思ってたけどこれはラッキー

奏志は花飾りの女の子、初春飾利の目の前に着地した。

「そんなに泣いて何があったんだい？」

「お、お願いします助けてくださいッ！中で風紀委員が強盗に襲われてて……！！」

奏志の服にしがみ付き泣きじゃくる初春。奏志はそんな彼女の頭にポン！と手を置きグシグシと少し乱暴に撫でた。

「ちよっ？何するんですか!？」

「落ち着いた？こういう非常事態の時こそ慌てず落ち着いて冷静にならないと助けられるモノも助けられなくなるよ」

初春を見てみるとスツカリ泣き止んでいた。どうやら落ち着いたみたいだ。

「で、中にいる人たちを助けて欲しいんだっただね？」

「は、はい！お願いします」

「んじゃ先ずはこの邪魔な防犯シャッターをこじ開けるとしm……いや必要ないな」

「え？それってどういうk（パリン、メキメキメキメキッ）……」

初春の質問より早く答えは帰ってきた。防犯シャッターが内側から鉄球によって一人一人が通れる位の大きさにこじ開けられたからだ。

「さて人質救出ミッションスタートだ」

## 第5話 原作初介入 前編（後書き）

作者「という訳で実は黄泉川愛穂がお隣さんという設定だったのでした。にしてもあんな美人にいきなり抱き締められるとは羨ましいぜコンチクショー！」

奏志「なら一回試してみるか？気道と頸動脈を無意識に圧迫してくるから三秒以内に気絶して下手すりゃそのまま本当の天国に行く事になるがそれでも良いなら呼ぶぞ」

作者「ナラエンリョシテオキマス」

奏志「正しい判断だな」

愛穂「そんなに抱き締められるのが嫌か？」

奏志「嫌じゃないけど……って愛穂姉！何時から居たの！？」

愛穂「最初から奏志の後ろに居たじゃんよ」

作者「今回のゲストとして俺が呼んだんだよ」

奏志「全く気がつかなかった」

愛穂「ご都合主義バンザイってやつじゃん」

奏志「なあ作者、お前が言つとメチャクチャうざいセリフも愛穂姉が言つと仕草も相まってか色っぽく見えるんだが」

作者「それは俺も思った。ティエリアはどうだ？」

ティ「そうだな、僕h…って何を言わせるんだ！トランザム、ライザー！！！」

奏志&作者「「砲撃の次は斬ぎにや」あああああ！！」

愛穂「大丈夫なのか、あれ？」

ティ「何時もの事なので気にしないで頂きたい。それより恒例のヤツをやりたいのでそこで伸びている二人の代わりにお願いします。これセリフです」

愛穂「了解じゃん。行くぞ、せ」の

二人「この小説を読んで頂いている読者の皆様、お気に入り登録して下さいました皆様、本当に有難う御座います。誤字・脱字・感想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。それではまた次回お逢いしましょう」

作者「イテテ、まさかダブルオーを使うとは…その内劇場版の機体で一斉射撃してきたりして」

奏志「現実に取りこりそうな冗談を言うのは止めてくれ！」

## 第6話 原作初介入 後編（前書き）

作者「やっと出来たよ」

奏志「待ちくたびれたぞ」

作者「ストーリー忘れないように原作見直してたら何時の間にか寝ちゃっててな。アルバイトも忙しいわで書く時間がなかなか取れなかったんよ」

奏志「しなきゃいけない事をやってて遅れたんなら仕方ないな」

作者「そうなんよ。せやからそろそろ始めるで！」

奏志「何か口調が気になる……まあいいや、それではどうぞ」

## 第6話 原作初介入 後編

Side 白井黒子

さて、大見得を切ったはいいもののどうしたものでしょうか。初春は何とか逃がせましたがわたくしの足はこのザマ、固法先輩も気を失っている状況では犯人確保は困難……アンチスキル警備員の到着まで人質を取られないよう引きつけるしかありません。

「この状況で随分と余裕じゃないか」

「何を言ってもお前が何を考えてるか当ててやろうか」……」

まさかこちらの考えがばれてますの!?

「警報が鳴ってだいぶ経ち間もなく警備員が到着するだろう。コイツはここから出られないのだから羊地を取られないよう引きつけられればこちらの勝ち……凶星だろ?」

マズイですの。このままでは……

「警備員がいくら来たところで怖くはないがまあ確かにウジャウジャや囲まれるのは厄介だな」

男がポケットから鉄球を取り出して投げるとガラスと防犯シャツとを物ともせず突き破ってしまいましたの。

「『イコールスピード絶対等速』。俺が投げた物体は動きはニブいが前に何があるうとも能力を解除するか投げた物が壊れるまで同じ速度で進み続ける」

何発もの鉄球が投げられアツという間に一人が軽く通れる大きさの穴が開いた。

「残念だったな思惑が外れて。だが時間が無いのもまた事実、オマエの能力で俺を手伝えば解放してやる。いや…そうだな、よかつたら俺と組まないか？俺とオマエが組めば無敵、悪い話じゃないだろ？」

どうする？犯人の目的はATMの金。刺激しないよう言う通りにしていれば少なくとも命の危険は無い。例えわたくしが犯人を見逃したとしても学園都市の監視網を突破出来とは思えませんし蹴られた顔も踏みつけられた手足にも痛みが走る。初仕事にしては十分頑張ったじゃありませんの。ですが……

「そうですね…絶～～～～っ対にお断りですのッ！仲間になる？生憎と郵便局なんか狙うチンケな泥棒はタイプじゃありませんの！！」

「良く言った！」

「えっ！？」

声のした方を見ると先程開けられた穴が更に大きな菱形に斬りおとされ、そこからコートを着た長髪の男性が入ってきてましたの。

S i d e e n d



Side 鉄奏志

「(さてどのタイミングで入ったものか……)」

奏志はシャッターに開けられた穴を見ながらタイミングを窺っていた。中から強盗犯と白井黒子のやり取りが聴こえてくる。と、その時……

「そうですわね…絶～～～～っ対にお断りですのッ！仲間になる？生憎と郵便局なんか狙うチンケな泥棒はタイプじゃありませんの！！」

とハッキリと自分の意志を言い切る声が響いた。

「(このタイミング！) 良く言った！」

手刀でシャッターを切り裂いて中に入るとその場に居た全員の顔がこっちを向いていた。

「何モンだデメエ！」

「何者か？まあ中に居る友達を助けるよう頼まれた一般人Aってところかな？」

ポケットに手を入れたまま犯人の問いを適当に受け流す……興味ないし。

「じゃあその一般人さんはサッサと退場してもらおうか！！」

男がポケットに入っていた鉄球を10個ほど纏めて投げつけてきた。

「いけない！避けてくださいですの！！」

白井が避けると忠告しているが俺は必要が無いのでその場から動かない。

「さっきの会話は俺も聞いていた。絶対等速、確かに使い方によっては十分脅威と言える……まっ、俺には通じないけどな」

「はんっ！だがもう回避は間に合わねえぞ。如何するつもりだ？」

どこか勝ち誇ったような顔をする強盗犯。お前のその幻想、粉々に撃ち砕いてやる。

「如何する？こうするんだよっ！」

宣言すると同時に拳を振り抜き飛んでいた鉄球を全て粉々に破裂させ再びポケットに戻した。

「……えっ？」

強盗犯は何が起こったのか判らないという顔をしている。

「何が起こったのか判らないって顔だな。なら特別サービスでもう一回だけ見せてやるよっ！」

最初よりやや遅く振り抜いて犯人の顎に直撃させた。犯人は数歩よろめいた後にその場にうつ伏せで崩れ落ちて気絶した。それと同時に店内に歓声が湧き起こる。

「床とキスしてな……で君がさつき外に逃がした子が助けて欲しいって言ってた風紀委員でいいのかな？」

あー知らないフリすんのメンドい。

「ま、間違いありませんの。この度はお助けいただきありがとうございます。貴方の名前をお伺いしても宜しいでしょうか？」

「別にいいけどそれよりも犯人の身柄拘束と負傷者の応急治療の方が先じゃない？すみません、ガムテープが何かあれば貸して欲しいんですけど？」

「は、はいこちらをどうぞ！」

渡されたガムテープで犯人二人を身動き取れないようグルグル巻きにしてから気絶したままの固法さんに近寄る。

「この人の応急処置をしますが人の少ないスペースを貸してもらえませんか？他の人はもう直ぐ其処まで警備員が来てるのでそちらの指示に従ってください。それと風紀委員の君は一緒に来て証人になつてくれないかな？」

「証人？どういう事ですか？」

「何時までも床に寝かせたままには出来ないだろ？だから運びたいんだけど証人がいないと後でセクハラで訴えられでもしたら厄介だから」「その…必要は無いわ」あれ、意識戻ってたの？」

倒れこんだままの体勢で固法さんは声を発していた。

「ええ、貴方が入って来た辺りからね」

なら大体は理解してるか。

「傷の手当をしたいんだけど立てます?」

「肩を貸してもらえればね……それよりも貴方、何者?」

「ただの一般人Aでs「嘘ね」…どうしてそう思っんですか?」

肩を貸して固法さんを立たせながら訊く。

「一般人が一撃で鉄球を粉々に破壊出来るわけ無いじゃない」

「見えてたんですか? まあ隠す事でも無いし、一言で言えば世界最強の武人を祖父に持つ外からの転入生って感じですかね。あの程度の事は日常茶飯事でしたよ」

嘘は言って無いぞ。

「ど、どんな日常だったのかは追求しない方が良さそうね」

「助かります。話せば映画なら三部作、単行本なら14巻分くらいはかかる程濃厚な内容なんで……」

チラリと固法さんの顔を見ると冷や汗をかいていた。

「あの、場所の準備が出来たのでこちらにどうぞ」

店員に案内されボードで区切られた一角に入った。

「あの、わたくしもいた方が……」

「あゝ最初はそのつもりだったんだが意識が戻った以上証人は必要なくなったから椅子に座って大人しくしときんさい」

白井を追い返すと固法さんを椅子に座らせた。

「さて、先ずは身体に刺さった破片を取り除かなければいけないので服を脱いで背中を見せて下さい。その間はもちろん席を外しますんで」

そそくさと席を外しボードの裏に移動する奏志。シュルリと固法さんが服を脱ぐ衣擦れの音が耳に届く。

「じゅ、準備出来たわよ／＼」

顔を真つ赤にした固法さんが肩越しに俺の方を見ていた。肩から背中、腰の近くまで露出していて前は胸を隠すように腕を組んでいる……正直エロイ。

「今更言うのも何なんだけどよく俺を信用する気になりましたね。いくら治療の為とはいえ初対面の男の前で肌を晒す事に抵抗は無かったんですか？ってやっぱありますよね。出来るだけ早く済ませますんでジツとして下さい。それと少々荒っぽいですが我慢して下さい……行きますよ」

肌に触れないように注意して破片を掴み一気に引き抜く。

「ッ！！」

固法さんは痛みに顔を歪めた。

「もう少しで破片の除去が……終わりましたんで消毒して完治させますね」

「えっ！？それってどう言う……イタッ！」

固法さんがいきなりこちらを向こうとしたので鉄印の消毒薬くろがねじりし（主成分ドクターアロエエキス）を傷口にぶっかけて動きを封じた。

「これで消毒終わり。これから起こる事はあまり言いふらさないで下さいね（両手に氣を集中させて傷口を中心に流し込む）」

氣を流し込んで細胞を活性化させ自然治癒を加速させる。ものの十秒足らずで固法さんの背中にあつた無数の傷は映像を逆再生させるかの様に消えていった。

「治療、終わりましたよ。まだどこか痛い所とかありませんか？」

「無いわ……それにしても凄い能力を持っているのね」

服を着直しながら話してくる固法さん。

「超能力とはまた別物ですよ」

固法さんはこちらを向いたまま『えっ！それってどういう事！？』といった表情をしていた。

「『氣』という概念を知っていますか？」

「確か武術なんかで用いられる全ての人が保有している力の事だっけ？」

「人というより全ての生命体が保有している力なんです。貴方の認識でもあつてます、えっと……」

「固法美偉よ。君の名前は……」

「そっぴや何だかんだでまだティエリア以外に自己紹介してなかったな。」

「俺の名前は鉄奏志です」

お互いに簡単な自己紹介をして握手する。

「それで話を戻すと氣というものは武術の修行である一定のレベルまでなら大抵の人が扱えるようになるんですが鉄家は代々氣の扱いに秀でていましてね、その事もあつてかなり幅広く使えるんですよ。それこそ攻撃から治療までね」

「シャッターを斬りおとしたのも強盗犯を攻撃したのも全部氣の応用だったって訳ね」

「やっぱ固法さん洞察力が半端無ねえな。」

「正解です。強盗犯への攻撃、あれはポケットを鞘に見立てて拳速を極限まで高めて振りぬき常人には全く見えない速度でパンチを放つ技で居合い拳と呼ばれるものです。ついでに言つとシャッターを

斬りおとしたのは刃の形状で氣を固定しただけで鉄球を撃ち落したのも鏃状に固定した氣をぶつけて内部から破壊しただけですよ。それとそろそろ戻りません？警備員も到着したようですしもう一人の治療もしたいですし」

それもそうね、と席を立つ固法さんと一緒に窓口まで戻ると初春が白井の足にギプスをつけていた。

「この分じゃ治療はもう必要ないかな？」

「ひゃわあ！？」

突然背後から声がした為か初春は物凄く驚いた。

「そんなに驚かれると逆にこっちがビックリするんさ」

「う、ごめんなさい！」

「謝られても困るんだが…それより警備員も到着して大分落ち着いたみたいだし俺はそろそろ失礼s「お待ち下さいな」…まだ何か用？」

「ええ、今回の件の当事者として事情をお聴きしたいので風紀委員ジャッジメントの支部までご一緒に頂け無いでしょうか？」

メンドクセーな。けど固法さんに名前を教えた以上逃げた所で家に突撃かまされんのがオチだし、そっちの方がメンドクセーか。

「わかった、なら警備員に現場の引き継ぎして支部に行こっか」



「何で素人がそこまでテキパキと指示を出せるのかしら？」

固法さんが何かブツブツ呟きながらも警備員に現場を引き継ぎ俺達は風紀委員第一七七支部へと移動した。

〓風紀委員活動第一七七支部〓

「で、事情を聴くだけの筈が何で俺はこんなに大量の始末書を書かされてんのかな？」

もう30枚は書いたぞ。まだ終わんねーのか？

「そうばやかないの。事情はなんであれ一般人の貴方が公共施設のシャッターを破壊して更に強盗犯を気絶させたって事実は変わらないんだから。それとそれが最後よ」

さいですか。

「そんじゃ書き終わったから帰らせてもらっよ」

「ま、待って下さい！」

席を立とうとしたら今度は初春に呼び止められた。

「まだ何かあんの？」

「さ、先ほど固法先輩とも話し合っただんですけど鉄さん！風紀委員に入りませんか？」

ここで風紀委員に勧誘かよ！？

「一つ訊いていいか？何で今日学園都市に来たばかりの俺を風紀委員に勧誘しようって話になったんだ？」

「それは短い時間ではあったけれど貴方の行動を見て風紀委員に相応しいと思ったからよ」

「別に冷静になれば誰でも気付けるような事しかやってないと思うんだけど？」

「それでもあの判断を出せる人間はそう居るもんじゃないわ。だからこそ貴方の力が必要なのよ」

まあ冷静な判断が出来なきゃ危ない状況は今までも多々あったかな。

スペインでの目隠し手錠足枷状態での闘牛とかオーストラリア沖でのホホジロザメとの徒手格闘とか中東の紛争地帯の最前線に着の身着のまま放り込まれたりとか。

「俺を評価してくれるのは素直に嬉しいんだけどさ、こっちに来ただけでまだ荷解きも終わって無いし色々としなきゃいけない手続きもあつたりで暫く忙しいからさそのお誘いは暫く保留にして貰えるとあり難いんだけど？」

「そついう事なら仕方ないですわね。それでは答えが出ましたら何時でも結構ですのでこの支部にいらして下さいな」

「そうさせて貰うよ。それじゃあ今日の所はこれでお邪魔さま」

立ち上がって支部を後にして帰路に着いた奏志。途中人通りの少ない路地に入り誰も居ない事を確認して呟いた。

「明日会いに行くから出迎え宜しくね」

と。

## 第6話 原作初介入 後編（後書き）

奏志「なあ作者？」

作者「なんや？」

奏志「俺に巨乳好きって設定を追加した？」

作者「……………別にしてへんよ」

奏志「今の間はなんだ？」

作者「というよりも話しの流れ的にそうなってしまっくんよ。白井黒子と初春飾利の約束を邪魔する訳にはいかへん。そうなると残りのケガ人は固法さんしかおらへんからな」

奏志「それはそうかもしれないが……まあいい。それより最後のあの一言は次回への布石か？」

作者「そんなとこやね。詳しくは言えへんけどな」

奏志「俺も深く追求する気はねーよ。あれはもう御免だからな」

作者「ほなそろそろお終いにしよか」

奏志「そうだな、せーの」

二人「この小説を読んで頂いている読者の皆様、お気に入り登録して下さいました皆様、本当に有難う御座います。誤字・脱字・感

想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。それではまた次回お逢いしましょう」「

奏志「なあ前書きからずっと気になってただけだよ?」

作者「なんや?」

奏志「何でどこぞの子狸部隊長みたいな口調なんだ?」

作者「気分や!」

奏志「さいですか」

第7話 会談、そして暇潰し 前編（前書き）

奏志「もう今年も今日で終わりだな」

作者「そうだな、時間が経つのは本当早いよな」

テイ「そんな貴重な時間を無駄には出来ないから本編を始めるぞ」

三人「」「」「」

## 第7話 会談、そして暇潰し 前編

チュンチュン チュンチュン

小鳥の鳴き声が静かな庭に響き渡る。

現在時刻は午前8時、多くの人が朝食に登校中であろう時間に奏志は庭にいた。その手には黒い刀身のサーベル（クライスト）を持ち目の前には長さ2mほどの丸太が何の支えもなく縦にして置かれている。

「フウ~~~~~……ハッ！」

一閃。

放たれた斬撃は丸太を揺らす事無くその表面に傷をつけた。

「セイツ！ハイハイハイ~~~~！！」

二閃三閃と続けて斬撃を放ち続け表面を削っていく。

「これで……ラストオ！」

最後の一闪を放ち鞘に納める。幾度となく斬りつけられた丸太はその姿をある杖に変えていた。

「あらら、シュベルトクロイツの先っちょが少し欠けちまってる。はぁ〜まだまだ修行不足だな」

杖を拾い上げ夜笠に収納し木屑等を片付けて家に入る。

「時間まで何して暇潰そう?」

朝食を作りながら今日の予定を考える。

アレイスターに会って色々とお話したら結構暇になるんだよね。学校は冬休みだし。別荘で過ごすのも良いんだけど更に時間が長くなるし、かと言って学園都市に来て早々の外出届なんて許可されるとも思えん……久し振りにゲーセンでも行くか。

「とりあえずそっちには9時頃行くから宜しくね」

奏志以外誰も居ない筈の部屋で話しながらテーブルに食事を並べる。

今日のメニューはベーコンの葉・ネオトマト・羽衣レタスのBLTサンドに骨付きコーンのポタージュスープ、デザートにキューティクルベリーとやや軽め。

「この世の全ての食材に感謝を込めて……いただきます」

サンドを一口頬張る。

「ベーコンの葉とネオトマトが良い味出してて美味い。骨付きコーンのポタージュスープもしつこくなくそれでいてアツサリ過ぎでもなく丁度合ってる」

『奏志、味わって食べるのはいいがそろそろ時間も気にした方がいいぞ』



人形型携帯端末にコピーしたティエリアの人格の指摘で時計を見ると既に8時50分を回っていた。あっ！因みに人形のモデルは黒のポメラニアンね。

「まだ大丈夫だけどそろそろ行くわ。空き巣とか来たら再生可能範囲でならO H A N A S H Iして良いから、そんじゃ行つて来まゝす」

ピョンピョンピョーン、と電柱やビルの壁・屋上などを足場にして飛び跳ねながら窓の無いビルへと向かって行った。

後にこの光景を見た一部の人間により『学園都市を飛び回る謎の影！その正体は現代に迷い込んだ忍者か！？』などという都市伝説が出来たとか出来なかったとか……

〃〃窓の無いビル前〃〃

「到〓着ッ！」

スタツ！とビルの目の前に着地する。辺りは静かな雰囲気包まれており車のエンジン音はおろか鳥の鳴き声さえも聴こえない。

「っていくらなんでも静か過ぎだよね〓そう思わない？その木の陰からコソコソとこつちを監視してるお下げ髪のツインテールさん」

「…良く私が此処に隠れてるって分かったわね。貴方からは完全に死角になってた筈なんだけど？というか何で髪型まで分かるのよ？」

出て来たのは防寒服をガチガチに着込んだシヨタコンの案内人、結標淡希だった。

「んゝ何で髪型まで分かるのかは企業秘密、如何して隠れてる場所が分かったのかは呼吸音が聴こえたのと視線を感じたから」

「一体どんな耳してるのよ！？（汗）」

「どんな耳ってこんな地獄耳ですがなにか？それよりも早いとこ連れてって欲しいんだけど？」

「貴方の規格外さにビックリして忘れる所だったわ。レポート 転移するから私につかまって」

そう言われ結標の肩を掴むと次の瞬間には景色は一変していた。ケール類が張り巡らされ、部屋の中央には何かの液体で満たされたピーカーが設置されており、その中に男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える緑の手術衣を着た『人間』、学園都市統括理事長アレイスターⅡクロウリーが逆さまの状態でプカプカと浮いている。

結標は俺を運び終わるとその場から消えていった。

「よくk「質問なんだけどアンタって男？それとも女？」それは君の想像に任せるが会話の途中で割り込まないでもらいたいな」

「それは失敬」

そんな事これっぽっちも思っただけだ（爆笑）

「思っただけだと言う必要はない。それよりも鉄奏志、君は何処まで知っている？」

「知って如何する？」

「質問に質問で返すのは感心しないな」

「そうかい？まあ知られて困る事でも無いし答えるがそう多くは無い」

これは半分嘘で半分本当の事だ。完全記憶能力によって忘れてしまふ事はないが俺というイレギュラーが存在する事で原作と乖離する部分がある以上、原作知識に頼る事は出来ない……だから知られて困ることも無いという部分は本当に頼り切る事は出来ないが物語を知っているという事でそう多くは無いという部分が嘘になる。

「本来なら知りえない情報で言えばこの空中に漂っている滞空回線アンダーラインとか一部の暗部構成員の名前と能力名とかアンタが世界で最も魔術を侮辱した魔術師のアレイスター「クロウリー」本人であるとかアンタの計画にエイワスって名称が関係しているって程度だぞ」

「……………」

あれ？なんかアレイスターさんフリーズしてない？……まあいつか、話し続けよ。

「滞空回線は俺のプライベート空間内のは勝手に排除するし、暗部

構成員の情報はどうこうする積もり無いし、アンタの過去とか計画とかは今の俺にとっては如何でもいいから置いて俺からアンタに要望が幾つか有るんだが……」

「……一体なんだね？」

あつ、再起動した。

「先ず第一に俺の能力に関しては解析不能という扱いにする事。第二に俺の行動に対して統括理事会は干渉しない事。第三に学園都市内での武器携帯と緊急・非常時の使用許可の三つだ」

「ふむ……」

アレイスターは顎に手を当てて何か考える仕草をする。

「第一と第三は構わんが第二は此方にどういった利益が有るのかな？」

利益？そんなものある訳ないじゃん！寧ろ……

「第二の要望だがこれは利益というより万が一の事態の時に被害を最小限で食い止める為の措置だ。万が一にも俺が学園都市内で死亡した場合、統括理事会が干渉していたら冗談抜きで学園都市は物理的に跡形もなく消滅するからな……爺様、鉄陣内の手で」

アンタなら爺様の實力知ってんでしょ！？大戦時、爺様がいなければ日本は完全焦土となり、攻勢に出れば世界の半分が日の丸を掲げていたとまで謳<sup>うた</sup>われた爺様の實力をよお。

「確かに彼だけは敵にしたくないな……いいだろう、全ての要望を呑もう」

すんなり要求が通ったな。

「それじゃあ話はこれで終わり。武器携帯・使用許可証は早急に発行してくれよ」

「では案内人を」必要ない「……どういう事だね」

「第一の要望に繋がる事だが俺の能力は記憶した事象を再現出来る能力でな。彼女に触れて空間……いや座標移動はもう憶えた」

座標移動でその場を後にする。アレイスターは奏志の消えた場所をジッと見つめていた。

「まだ隠している事が有る様だが私のプランにどのような影響を与えるのか……しばし観察するでしょう」

そう言ったアレイスターの顔は僅かに口角が上っていた。

「さて、ゲーセンは何処かいな〜っと」

窓の無いビルを後にした奏志は当初の目的通りゲームセンターを捜して街を散歩していた。

「お！見つけ え〜何々？」警備員監修全方位3D格闘シューティング、最高難度をワンコインでクリア出来た方先着一名様には賞金十万円！』ほっほ〜」

賞金ではなく全方位3D格闘シューティングの部分に興味を惹かれた奏志は中に入りそのゲーム機のあるコーナーに向かった。ゲーム機の前には観戦用のモニターが設置されておりそこには黒山の人だかりが出来ている、どうやら誰かが挑戦しているよう……あつゲームオーバーになった。

「ちつくしよお！何回やつてもクリア出来ねえ！！こんなんクリア出来る人間なんていんのかよ」

ぶつくさと文句を言いながらゲーム機から出て来た少年はそのまま帰っていった。

「なあマジでこれクリア出来んの？」

「いや無理じゃね？俺、結構これに挑戦した奴見てきたけどさ、未だに半分クリア出来た奴すらないし…」

因みにモニターの横には設置されてから現在までの挑戦者数が記録されていた。

挑戦者数：19999人

最高記録：40%クリア

こんだけの人数が挑戦して最高が40%って監修した警備員の皆さん、調子に乗り過ぎじゃね？

「てか幾ら設定が三国志って言ってもさ、五万人相手にこっち一人ってどんな無理ゲー？って話だよ」

いやいやそれなら10%クリア出来ただけでも一騎当千の猛者になれるからな。にしても40%のクリア率出した奴って一体……聞いてみるか。

「ちょっといいか？この最高記録出した奴について聞きたいんだが」

「え？そりゃあ別にいいけど何が知りたいんだ？」

突然の質問にも馴れているのか疑問に思う事もなく返答してくる少

年。

「この最高記録出した奴の武装。説明見る限りじゃかなり選択肢が多いみたいだし」

このゲームには石の槍から戦車までありとあらゆるジャンルの武器があり、プレイヤーはそこから五つの武器を選択してその武器で敵を殲滅していくという物らしい。尚、敵の持っている武器は奪う事も可能だとか。

「ああそれね、この記録出した奴が選択したのはM82A1に無理矢理連射機能を追加した試作モデルとM134ミニガンとM79グレネードランチャーにAA12ショットガンと日本刀だったな。あと弾丸は無限仕様になってたぞ」

何となくオチが見えたな。

「で最初は上手くいったものの突撃かましてくる敵にミニガン掃射してたら隠密にやられたとかってオチ？」

「まさにその通りだ」

それなら隠密に注意しながらやってりゃ大丈夫か。いつそ隠密が意味を成さない乱戦に持ち込むのも有り……

「情報ありがとさん、ちょっと挑戦してみるわ」

「頑張れ！そして俺達にエンディングを見せてくれ」

「任せとけい」



挑戦手続きをしにカウンターへと向かった。

## 第7話 会談、そして暇潰し 前編（後書き）

作者「これで今年の投稿も最後か」

奏志「だな、色々突っ込みたい所はあるが今回はナシにしてやるよ。なあティエリア」

ティ「僕が犬の姿で登場してる部分を除いてだな」

作者「人の姿だと何かと問題が起こりやすいから動物の姿にさせて貰った。あとポメラニアンなのはちょっとした伏線だ、それ以上は話せん」

ティ「それはよかった、危うくメントモリを発射する所だったぞ」

奏志「危ねーな、俺まで巻き添えになる所だったぞ」

作者「ゴメンゴメン。次はメインキャラは奏志だけだからそれで勘弁してくれ」

ティ「まあ今回の流れから言えばそうなるのは仕方が無いな」

奏志「んじゃ今年最後のあれ、やりますか。せーの」

三人「……この小説を読んで頂いている読者の皆様、お気に入り登録して下さいました皆様、本当に有難う御座います。誤字・脱字・感想・質問など御座いましたら気軽にどうぞ。また来年にお逢いしましょう。それではよいお年を」

作者「今年は就活が大変だったな」

奏志「お疲れさん」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8945y/>

---

とある世界の幻想書庫

2011年12月31日15時59分発行